

Eさん (59歳会社員) の例



のうこうそく
脳梗塞 (損傷部位が両側後頭葉)

<脳梗塞とは>
脳動脈の閉塞、狭窄のため脳組織が壊死する
※後頭葉は、目からの情報を一つにすることで、物を立体的に見る働きをする。

Eさんは現在妻と二人暮らしですが、長男夫婦が近くに住んでいます。Eさんは実直な努力家であり、これまで仕事一筋に頑張ってきた甲斐もあり、一代で自分の会社を築きあげました。ある日の夜、自宅のトイレに行った際、急に倒れてしまいました。そして、救急車で救命センターに搬送されました。意識が戻った後、身体的・言語的な問題はなかったのですが、地理的な場所がわからなくなってしまいました。病後は、長男が会社を継ぐことになりました。入院中も自分の部屋、トイレ、訓練室がわからずウロウロして(※)、何回くり返して場所を教えても覚えられない状態です。本人は自宅に帰ってからもトイレ、風呂、台所、仕事場がわからず、困っています。

※認知症による徘徊と異なり、本人に自分がどの場所にいるかわからないという自覚があるため、あてもなく歩きまわったりせず、他者に道を聞くことができます。



☆Eさんの高次脳機能障害は？

ちしきしょうがい
「**地誌的障害**」「**記憶障害**」

「記憶障害」についての詳しい解説は56ページへ
「地誌的障害」についての詳しい解説は70ページへ

☆初回面接の様子

※患者さんと面接を行うことによって、今、患者さんがどのような症状なのかを把握していきます。

自分が一代で会社を築きあげた人だけあって、対応は社交的で自分からよく話します。会話は問題ありません。「今までは、手帳を持たなくても自分の頭の中に全て入っていて、記憶力には自信がありました。今は病院へ行くときの道順もわからなくなったことがショックです」と言っていました。家の中でさえも場所がわからずウロウロするので、社員の前に出られないもどかしさを感じており、「社員に社長がおかしくなったと思われるのがくやしい」とも漏らしていました。



Eさんの特徴

- ◎病識がある
- ◎場所がわからないことに困っている



※まちがわないで目的地へくりハビリを行きましょうと促します。

※目的地までの「手がかり」を活用する訓練の説明をします。